

# —論文概要—

表題	日本語対話における皮肉検出への大規模言語モデルの応用 —コンピュータに言外の意図は読めるのか—
----	--

学校名	愛知県立愛知総合工科高校	
共同研究	グループ名	
	氏名	分担内容
	代表者	
	共同研究者	
	共同研究者	
	共同研究者	
個人研究	研究者名	近藤 大紀
	学年	3年

## ＜要旨＞

話し手の意図を正確に理解する上で、皮肉の検出は重要な課題である。特に、皮肉が持つ「婉曲的に相手への否定的な感情を伝達する」という特性は、インターネット上の誹謗中傷に多用され、その自動検出を困難にしている。皮肉を正確に識別できれば、誹謗中傷対策に限らず、人の言葉を解釈する多くの自然言語処理タスクの精度向上に寄与することが期待される。

本研究では、高度な文章生成が可能な大規模言語モデル(LLM)である Google Gemini を使用し、その皮肉検出の有効性を、従来から高い精度での文章解釈・処理が可能な Google の言語モデル BERT と比較検証した。LLM には指示文を工夫する 3 種の「プロンプティング」を、BERT には判別例を学習させる「ファインチューニング」をそれぞれ適用した。検証は、皮肉と非皮肉の例を等分に混ぜた「均衡データ」と、実際のデータ分布を模した「不均衡データ」の双方で行った。その結果、均衡データでは LLM が BERT を上回る性能を示した。一方、不均衡データでは全モデルの性能が低下し、BERT が LLM をわずかに上回ったものの、総合的な精度(F1 スコア)は 0.11 という極めて低い値にとどまった。このため、実環境を想定した不均衡データにおける皮肉検出においては、既存の手法とは異なる新たなアプローチによる再検証が必要であることが分かった。